

一年のはじまりにあたり

岐阜高山教務所長 海老原 章

新年あけましておめでとうございます。今年も除夜の鐘の音とともに、新たな年を迎えさせて頂けました。昨年同様、本年も何卒よろしく願いいたします。

昨年12月には、岐阜別院におきまして報恩講を勤めさせていただきましたが、様々な場で宗祖親鸞聖人の報恩講のご縁をいただきながら、過ぎた一年に実感する言葉 思いを馳せたことであります。

毎年一年のはじまりには、私自身、心が引き締まる思いをいたしております。2022(令和4)年という年が始まった訳ですが、年が改まりますと、過ぎた一年に思いを巡らすと同時に、新たな年の始まりに自身の歩みを憶念するのは、私だけではないと思います。

時の流れは永久に続いていくものですが、我々の先人がその時の流れを、一年という形で、ある意味区切りをつけられたことであります。その永久に続く時の流れの中で、一年が終わり、また一年が始まる。そのことによって一年を振り返り、また新たな年に気持ちを切り替えていく、私たちは、そういう日常生活を送っているのでありましょう。

やがて、一月ほど経ちますと、梅のつぼみが咲きほころび、そして更に一月以上経過しますと、桜の開花が間近いとの便りが届きます。この時期になりますと

自然の周期の確かさを感じます。

ある染織家の方が興味深い話をされておられました。それは「花そのものでは、色は染まらない。桜の花弁ばかりを集めて染めると、灰色がかった薄緑色になってしまう。花が咲く直前の幹を煮出して染めると、匂いたつような桜色になる。九月に染めても同じ色は得られない。このことは自然の周期を予め伝える暗示にとんでいる。」と語られています。

我々の思いやはからいをはるかに超えたところで、確実に時は流れていますし、目には映らないところで木々は樹液を巡らし、花のいのちを膨らませているのでしょうか。今日とひと繋がり of 明日が来ると実感する言葉でもあります。

人間が生きるということ、それは常に生きること自体を問い続けることにならないのでしょうか。

中途半端に生きている自分自身の「あり方」が厳しく問われているような気がいたします。

来る 2023 年には、真宗本廟におきまして「宗祖親慧聖人御誕生 850 年・立教開宗 800 慶讃法要」をお迎えいたしますが、それに先立ちまして、ここ岐阜高山教区では、本年 10 月 16 日（日）に「慶讃法要お待受け大会」を予定しております。親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要の「南無阿弥陀仏人と生まれたことの意味をたずねていこう」のテーマのもと、皆さまとともに歩

みを進めてまいりたく、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。